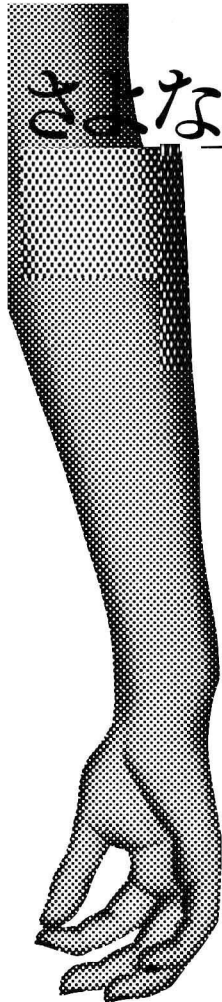


さよならなんてこわくない
桐島洋

さよならなんてこわくない

同島洋子



桐島洋子(きりしま・ようこ)

昭和12年東京生まれ。

駒場高校卒業。文藝春秋に勤務。

昭和40年退社。フリーのルポルタージュ

・ライターとして、文筆活動を始める。

昭和47年に『淋しいアメリカ人』で、第3

回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。

主著 『風の置手紙-渚と渚と能』(角川書店)『淋

しいアメリカ人』(文藝春秋)『女がはばたくと

き』(PHP)『女ざかりの美学』『生きることを

熱烈に愛する40のお話』(じゃこめてい出版)

『聡明な女は料理がうまい』(主婦と生活社)。

検 印 省 略

さよならなんて
こわくない

定価七八〇円

一九七七年四月一〇日 初版 発行
一九七七年七月五日 七版 発行

著 者 桐島 洋子

発行人 柳井乃武夫

発行所 日本交通公社出版事業局

東京都千代田区神田鍛冶町三ノ三

編集部電話 二五七—八三六五

振替口座 東京〇—二九四〇三一

印刷所 凸版印刷株式会社

□落丁・乱丁はお取替さよならなんて

◎桐島洋子 1977-52-151

0000-7110-5847

さよならなんてこわくない

装
幀

山
口
は
る
み

さよならなんてこわくない

.....

目次

いい女になるためのライセンス……………7

川は生きている。川の流れ、いのちの流れ… 9

どうしてあなたは京都へ行くの？ 18

“旅は道連れ”というけれど… 28

新婚旅行ってなんなのさ 38

生命の洗濯の水をケチってはいけない！ 47

パッケージ・ツアーも料理次第 56

限りなく蒼いギリシャの空と海の間で… 66

私が出逢った“白馬の王子様” 76

新しく、田舎をつくろう 86

さよならなんてこわくない 94

愛にまみれるのも孤独に浸るのも同じくらい好き！

104

いい女になるためのライセンス 114

誰だってひとりでは生きられない 124

書物の森を旅して

書物への恋は女を美しくする

175

ヒトラーはここにいて／左ききの本／映画だけしか頭になかった

若き実力者たち／ディラン、風を歌う／明治の骨董

今昔いろはカルタ／日本人の芸談／風土／ヴェロニカのために

海からの贈物／ギリシャわが愛／定年後

敬語／失敗しないおしゃれ／兄貴として伝えたいこと

性の自然革命／あなたはなぜ愛するの／未亡人

ガールズ・ビ・アンビシャス！

132

女体の美しさをいつまでも護る女に

140

「女だから」はもうたくさん！

146

それでもあなたは大学へ行くの？

153

いわせてもらえば……

209

近ごろ目につくあさましい『愛』 211

マイカーは大それた贅沢 212

入学しただけでスターきどりととは…… 213

浮わつた『見直しブーム』 215

スキャンダルでも自己顕示する女 216

悪質な男のおしゃべり 217

女でよかったと思うこと 219

外国語習得だけが夢だなんて 220

『三食昼寝族』の無責任な顔 222

聡明なヒトは料理がうまい 223

そんなに急いでどこへ行く？ 224

女ざかりの美学 226

市場は主婦族の鏡 228

日本語に寄せる私の愛着 231

あとがき……

236

本文中写真 いはら・えい

1

いい女になるためのライセンス

川は生きている。川の流れ、いのちの流れ……

今年の元旦はタイのバンコックで迎えた。十年ぶりのタイである。

十年前の冬、私はフランスのマルセイユから白い客船に乗って、地中海を抜け、スエズ運河を通り、アラビア湾を横切り、アジアの港々を巡りながら日本へ向かう、一ヶ月余りの船旅を続けていた。

そのとき私は一人だった。いや、二人というべきかもしれない。私の軀の中には、まだ男とも女ともつかない、しかし確実に元気で食欲的な道連れが一人、キック・ボクサーのように暴れまくっていた。この道連れは私の二人目の隠し子である。雑誌記者という職業を維持するために少なくとも公的には独身を通してながら、私はこっそり着々と子供作りを開始していた。私の軀の膨みは目立たなかったから、服装や立居振舞いに工夫を凝らせば、なんとかハカ月までは周囲に気づかれず普通に勤めを続けることができた。最後の二ヵ月だけはさすがに隠しきれないから、仮病を使って二ヵ月間欠勤し、海辺の隠れ家で久しぶ

りの夏休みを泳ぎ暮してのち、最初の娘・渚を無事出産してただちに仕事に戻った。そして二人目は、どうせ休みついでに長年待ちこがれていた海外旅行をして帰りの船の上で産もうと思い立ち、まず一ヵ月がかりでソ連からヨーロッパへとユーラシア大陸をゆっくり横断してから、最後の一ヵ月を過ごすこのカンボジ号に乗り込んだのだ。

なにしろそれははじめての海外旅行だったから、すべての出合いが鮮烈だった。私は大き過ぎる感動と、それから多分重過ぎる「荷物」のため、ハアハア息を弾ませながら、あらゆる見聞と経験をあまさずむさぼり歩いていた。

親孝行な赤ん坊は、私が最後の港の香港に至るまですっかり見物しおえるのを待って、さらに船上のクリスマス・イブ・パーティも存分に楽しませてくれたのち、日本に着く寸前のクリスマスの朝に産声を挙げてくれた。この二番目の娘は、濡で生れたから濡と名付けた。フランス船のクリスマス・ベビーだから、船長さんがノエルという名もつけて、お祝いに本場のシャンペンを抜いてくれた。

そのノエルがもう十歳になって、私と一緒にバンコックへやって来た。渚も、それから三番目の子供の舵^{かた}もいる。舵は、その後出版社をやめた私が、フリーの従軍記者になってヴェトナム戦線で暮しているときに身籠もった男の子だ。タイへ向かう途中、飛行機がヴェトナムの上を通ったとき、私は舵に囁いた。

「ねえ、あなたはこの辺りでマミイのお腹に入ったのよ。マミイはその頃、凄くカッコいい野戦服を着て鉄兜をかぶって、大砲の弾がビュンビュン飛んでくるジャングルでキャンプしていたの。イサマシイでしょ。だからあなたも勇ましくなってね」

元旦の午前六時にホテルを出た親子四人は、さすがにまだ人気の少ない朝ぼらけの街を、一列横隊に手をつないで歩き、メナム川の船つき場に向かった。ここからボートに乗って水上マーケットの見物だ。

バンコックの川はたくましく生きている。この川は道路であり、広場であり、市場であり、家々の庭であり、玄関であり、台所の水場であり、洗面所や物置でもある。あらゆる面で、水に密着した民衆の日常生活が削き出しになった風景の中をボートは進んでいく。観光客の好奇の視線に今さらたじろいだり気取ったりする者はなく、皆淡々とのどかに洗濯や炊事や水浴を続けている。これは私にとってなによりも懐かしい風景だった。

「間に合ってよかったわ」と私は呟いた。

「なにが？」と渚が訊く。

「マミイはね、この川が大好きなの。なんとかあなた達に見せたいと思いつけてたのよ。でも方々でどんどん川が死んでいくでしょう。ここももう駄目なんじゃないかと心配して

ただ、ちゃんと生きてくれた。そして皆また同じように暮しているわ。十年前にも、あの家のテラスではお尻を裸にした赤ん坊が、犬と遊んでいたのよ」

「ふうん、同じ赤ちゃん？」

「いや、それは同じ筈はないわね。あの時のあの赤ちゃんもあなたと同じように大きくなっちゃって、もしかしたらもう洗濯なんかして働いてるかもしれない」

バナナ売りの小舟が近づいて来た。まだ青いバナナを一房買い、早速分けてはおおぼると、思わず顔見合わせるほど美味しい。

「面白いでしょう、この川って。なんでもあって、そのまま人生みたいでしょ」

「ジンセイ？」

「そう、人間が生まれてから死んでいくまでの全部。いろんなことがあるけど、それが一つの川でつながれて、ゆるりゆるりと流れているのよ」

川は人生、人生は旅、旅は川……と心の中で独りごちながら、私もよく流れてきたものだ、これからまたどこまで流れていくのだろうか、そして私が新しく作ってしまったこの小さな三つの川はどんな流れに育ち、どんな旅をするのだろうかと思ひ、ふとそろそろいいような心持にとらわれた。

そんな感傷がしばらく私を無言にし、潸がいぶかしげに私の顔を覗いた。

「マミイ、くたびれた？」

「ううん、こんなことでくたびれたりしないわよ。もっと大変な旅行をしょっちゅうして
るんだもの」

「いいなあ、マミイはいつもいろんなところに行けて。あたしもオトナになったらマミイ
みたいになりたいな」

「どうぞ、どうぞ。世界は広いわ、あなたに見てもらいたいものがいっぱいあるわ」

そう答えながら私は、そのさまざまな景色をかつてはじめてながめたときの自分を思い
返していた。同じ場所へ戻っても、あのみずみずしい驚きや喜びと同じものは再び戻るま
い。旅を重ねるにつれて、旅人としての若さは失われていく。別に若い方がいいと言うつ
もりはない。私は私の旅の年輪をこよなくいとおしむ。それでもやはりあの若さはなつか
しい。未知の世界へのおののきが恋しい。

しかし、若い友人が、子供が、そしていつかは孫が、はじめての旅をするたびに、その
驚きや喜びを通じて、私もまたあの若さを追体験することはできるだろう。川は逆流でき
ないが、海になり、雲になり、再び川になり、懐かしい岸辺を洗うことができるのだ。

フローティング・マーケットのにぎわいに眼を睜^{みは}り、何もかも珍しがって大騒ぎの子供

達のおかげで、タイと私のあの初会の熱情がいきいきと甦り、私はタイム・マシーンに乗ったように若々しく心躍らせて十年前の川を下って行った。

やがてボートは「暁の寺」に着く。極彩色の寺院などというものは大体に悪趣味なものだが、タイに限っては、これがまさしく極楽浄土の彩りではあるまいかと陶然としてわれを忘れる美しさである。王宮もエメラルド寺院も、やはり変らぬ美しさで私を迎えてくれた。天上の音楽が色になって眼に響き渡るようなまばゆさの中で、あのと時臨月の私はしばらく茫然とたちすくみ、そのとたん、今にも中の赤ん坊がとび出してくるのではないかと思われるほど、メリメリと腰がきしんだのだった。

「あなたは、もうちょっとで、ここで生れちゃうとこだったのよ」

エメラルド寺院の回廊を歩きながら、私は濡に言った。

「ふうん、その方がよかったのに。こんな綺麗なところで生れるなんて、お姫様みたいじゃない」

「そうね、でも船の上というのもいいでしょ。あんな素敵な出生証明書を持つてる人は、ザラにはいないわよ」

「うん、ありがと。あたしもとてもそれは気に入ってるの。次に赤ちゃん生むときは飛行機の上にしたら」